

第2回日本機能水学会学術大会報告

岐阜大学農学部 早川 享志

1. はじめに

昨年度の第1回日本機能水学会学術大会に引き続き、第2回学術大会が平成15年11月27日(木)・28日(金)の両日にわたってホテル水明館コンベンションホール(下呂温泉)において「健康の維持と増進に役立つ機能水の本質を求めて」を大会テーマに開催された。開催地については、昨年の第1回学術大会の閉会式において第2回大会長の岐阜薬科大学葛谷昌之先生よりアナウンスのあったとおりである。岐阜地区での開催にあたって岐阜県の共催がほぼ決まっております、それを受けての開催となったことから、県の意向を受けての判断であった。岐阜県は、四方を山に囲まれ、木曾三川を擁し、温泉にも恵まれた山紫水明の地であり、水に対する関心はひとしお強いものがある。この地で第2回学術大会を開催できたことは、開催関係者にとっても願ってもない喜びがある。しかし、日本の真ん中に位置するという地理的条件もあり、全国からの参加者のアクセスを考えて開会は遅めに、閉会は早めにプログラムを組まざるをえず、かなり密な内容となった。以下にその概要について報告する。

2. 第1日目

第1日目は、大会実行委員長の岐阜薬科大学近藤伸一先生による開会宣言に始まり、大会長の葛谷昌之先生より水研究の重要性を込めた挨拶をいただいた。次いで日本機能水学会理事長の福井県立大学糸川嘉則先生は、昨年立ち上がった機能水学会にとっては、第2回目が非常に重要な意義を持つことを強調され、ハード面、ソフト面において今回は申し分ないとお言葉であった。来賓としては、ご多忙な公務の中、梶原 拓岐阜県知事がお見えになり、岐阜県としては、水研究を10年前から提唱していることを踏まえて今後の機能水研究には大いに期待しているとの挨拶があった。

開会式に続いて、大会長講演と特別教育講演が行われた。両講演は、一般公開講演として市民に公開する形で開催され、機能水について一般の方が理解を深める上で十分に有意義な講演会となった。大会長講演は「水の不思議を科学する—水は究極の保健薬になりうるか—」という題目で葛谷昌之先生により約30分に及んで水の本質について多方面から解説がなされた。また、特別教育講演にお

いては、北海道大学大学院鈴木鐵也先生より「機能水研究展開への課題：評価システムの構築の重要性」と題して講演いただいた。水という物質の不思議から、水への関心が高まった経緯、現状として認知されている機能水の紹介と、その客観的科学評価法の重要性について強調され、一つの評価モデルについて紹介された。これらの講演は、急速市民公開講座として位置づけが方針変更されたにもかかわらず、一般市民にもわかりやすく、イラストを加えてテンポよく話をしていただき、参加者からもわかりやすく良かったとの感想をいただき、実のある市民公開講演会となった。主催者側としては、まず、ほっとした滑り出しであった。

市民公開講座に続いての3時間は、一般口演が行われた。今年は一般口演数としては、昨年の34題を上回る38題の申込みがあった。その内訳は、電解アルカリ水関係11、農業関係4、医療関係7、食品関係5、そのほか基礎関係11であった。酸性あるいはアルカリ性電解水にかかわる演題が33と相変わらず多くを占めていたが、オゾン水を扱った演題は医療関係では1、食品関係では2と昨年よりも増加した。水の評価にかかわる演題が3あったことは今回の特別教育講演でも強調されたようにその評価法の重要性が認識されつつあることの反映であると感じた。今後の進展に期待したい。

第1日目の学術大会最後のプログラムとしては、シンポジウム(第1部)を行った。これまでのシンポジウムが従来の機能水シンポジウムを支えてきた各研究分野を中心としたセッション方式であったのに対して、今回は特定の分野に片寄ることなく広く機能水にかかわる内容を包括することを旨として「私たちの生活を取り巻く機能水の多様性」というテーマを謳った。北洞哲治先生には飲用アルカリ性電解水の有用性についてこれまでの評価の経緯と今後について、新井 高先生には、歯科領域特に歯内治療への酸性電解水の応用の現状について、塩田剛太郎先生にはオゾン水の有効性と応用面について、西本右子先生には、磁化水などの特性について各種分析手法を駆使した結果についてお話いただいた。すべてを網羅することは無理としても、機能水のいろいろな側面を包括して取り上げていただいた。今回のシンポジウムは、分野の垣根を超え、参加された多くの方に聞いていただけた。学会員の相互認識の向上と啓蒙に役立てば幸いである。学会としては異例の18